

# 暴力の理解社会学

## —— 沖縄の建設現場での参与観察をもとに

打越正行 *UCHIKOSHI Masayuki*

- 1 — はじめに
- 2 — 暴力を問う視座
- 3 — 暴力を調べる困難
- 4 — 建設業からみる沖縄社会
- 5 — 沖縄における男性性と暴力の理解社会学
- 6 — おわりに

【要旨】本稿は、暴力という社会的行為の理解社会学的研究である。

暴力は当の本人がまったく統制できない衝動でもなく、ある社会の興奮状態で起こる聖なる儀礼としてのみ扱えられるものでもない。また時代や社会を象徴する特殊なふるまいでもない。それは文明化された現代において、いつでもどこでも誰でも行使しうる世俗的な社会的行為のひとつである。ただし、それはジェンダーや階層によって、不均衡な形で現れる。本稿では暴力の加害者を他者化するのではなく、理解することを試みる。理解のためには、その暴力が特定の社会と時代のもとでなされたことを外さず、その合理性について書かなければならない。具体的には、現在の沖縄の建設現場を確かに生きる男性従業員によって行使される暴力を対象とし、その動機と行為の説明を通じて理解する。その理解に基づいて、沖縄社会に押し付けている犠牲や差別的構造を明らかにする。

### 1 — はじめに

本稿は、暴力という社会的行為の理解社会学的研究である。

ここで対象とする暴力は、沖縄のヤンキーの若者やその多くが働く建設業の従業員によって行使されたものである。それは、参与観察の場面で遭遇、もしくは伝え聞いた、身体を介した物理的暴力である<sup>1)</sup>。また本稿の対象は、建設業の従業員である男性の先輩から男性の後輩に対して、日常的に行使される暴力である。彼らの暴力をめぐる意味世界において、女性への暴力や性暴力は異なる意味をもつため、本稿では扱わない<sup>2)</sup>。後輩への暴力はむしろ誇示するものとして考えられ、女性への暴力や性暴力は避けるべきもの、恥ずかしいものとして共有されている。そのような暴力に対し、本稿では理解社会学の視角からアプローチする。それによって、暴力という行為を沖縄の社会構造と歴史的文脈といった固有性を押さえつつ、理解することをめざす<sup>3)</sup>。

## 2——暴力を問う視座

ここでは、まず暴力が人間科学において、どのように考えられてきたのかについて述べる(2-1から2-3)<sup>4)</sup>。そのうえで、そこでは捉え損ってきた暴力について示し、理解社会学というアプローチ、視座が有効であることについて述べる(2-4)。

### 2-1 行動としての暴力

心理学者のスタンプによると、暴力は人間の基本的欲求が満たされない時に生じるものと位置付けられる。また、暴力はある状況に由来して生じる行動として捉えられる<sup>5)</sup>(Staub 1999)。他方で、本稿ではある環境要因を意味付ける過程を経て生じる行為として、暴力を捉える。なぜなら、暴力を振るう者はある環境に対する反応として暴力を振るうだけではなく、その状況を読み取り、自身が暴力を行使することが、その状況でどのように意味づけられるかをある程度予測してふるまうためである。

またスタンプは政治的混乱などの特定の状況において、人間の基本的欲求不満が引き起こされやすく、暴力が現れやすい傾向を指摘する(Staub 1999)。特定の状況における基本的欲求不満の結果、まるで関数のように暴力という行動が現れるものとされる。環境要因によって暴力に迫ることは、それを回避することをめざす加害者臨床の場などでは有効な知見となるだろう。暴力を振るう本人自身も(「ブチ切れた」といった表現に顕著だが)それを制御できない状態として捉えられることが多いので、内的世界をふまえない反射的な行動として暴力を捉える図式は通念的に流布されている。

本稿は、このように暴力を行動として捉えることを前提とする。そのうえで、行動としてだけでは説明できない暴力、つまりその目的をもち、所属する集団の価値規範に基づいてなされ、また不完全ながら暴力を振るった後の見通しも把握している、そのような暴力を射程に入れる。

### 2-2 儀礼的暴力

続いて、主に人類学において扱われてきた儀礼的暴力について述べる。まず確認しておかなければならないことは、心理学者や社会学者とは異なり、人類学者の多くはフィールドで直接に暴力の場面に遭遇してきたことである。それゆえに、暴力を書くことにより苦悩してきた。田中雅一は、人類学者が暴力事件に巻き込まれてしまったことについて言及する(田中1998:3)。このように実際に事件や人間関係に巻き込まれることによって、書けなくなった暴力があることは想像に難くない。それに加えて、人類学者は「西欧近代社会の価値基準で他の民族について優劣の判断を下すことを批判」してきたため、「野蛮、残酷、暴力」といった否定的な異文化観に基づいた言葉で形容することを避けてきた(田中1998:4)。野蛮にみえる文化が実はそうではないということを人類学者はフィールドワーク

によって明らかにしてきた。しかし、暴力を書くことで、ふたたび野蛮な文化を書くこととなるという困難に直面する。ここで暴力をどのように書くのが課題となった。

そこで、人類学者は部族社会にとって、「否定的でない」暴力を書いた。それは部族社会を解体するのではなく、危機的狀態を脱したり、秩序を回復するための暴力である。クラストルは、交換（交渉）の失敗としての暴力ではなく、暴力をめぐるやりとりや、そのやりとりがなされる社会に注目した（Clastres 1977=2003）。またジラールは、供犠によって共同体の調和を修復し、社会的統一性を強化することを指摘した（Girard 1972=1982）。このように、ある部族における野蛮で残酷な暴力ではなく、むしろその部族社会を維持するための暴力を書いてきた。

そして部族社会において暴力を書くことは、その反転として国家による暴力を射程に入れ、批判する意図があった。松田素二は絶妙なバランス感覚でこの2つの暴力について論じる。松田は、ジラールが定式化した「相互暴力の連鎖が発生すると、贖罪の生け贄に暴力を加えることによって、集団内の相互暴力を集団外に追放するメカニズムが作用」（松田 1998: 266）する儀礼的暴力の構図に基づき、ジラルールの原初暴力と現代世界で展開している排除の暴力の違いを明らかにする。

その違いは両者の相互転換性にあるという。

ジラルールの原初暴力の世界では、それを行使して共同体から排除される加害者と、暴力を被った被害者との関係は、相互転換的な関係にある。つまりあるとき加害者であった成員は、次には被害者となる可能性を皆等しくもっているのである。（中略——打越）これに対して、現代世界の排除の暴力は、相互転換性を完全に欠落させている。（松田 1998: 267）

このように松田は国家による暴力と民衆暴力の違いを明らかにし、以下のように両者の関係について述べる。

現代世界の国家の暴力が、儀礼的暴力によって共同体の再生をはかるジラールの世界とはまったく異なることがよくわかる。現代の暴力はむしろ、国家からの不断の暴力作用によって解体された共同体に、民衆の実践暴力を引き起こし、それを巧妙に活用・排除することによって、新たな国家共同体を構成する支配の罫だったのである。（松田 1998: 268）

ここで松田は、民衆の実践暴力を国家からの暴力によって排除されるもの、そして排除された民衆は国家に抵抗するものとして位置付ける。例えば暴動などの事例をもとに「自律的な民衆の行動・道徳律の可能性」に注目し、「民衆の暴力は地下水脈のなかで息づいている。そして、暴動や一揆の場面場面で自律的共同性が誕生した瞬間に、国家に抗する暴力

として、地下から地上に蘇るのだ。巨大で不可視の近代国家の暴力システムに対してゲリラ戦を挑む、こうした民衆暴力の地下水脈の発掘こそが、儀礼的暴力研究の現代的意義」(松田 1998: 274) と指摘する<sup>6)</sup>。決して民衆暴力を楽観視することはないが、そちらに可能性をみていることはうかがえる。

しかし民衆による暴力は国家に対しては抵抗となるが、それは往々にして、実際にはより弱い者へと向かうものとなる。藤野裕子は、そのことをはっきりと述べる。

民衆の暴力行使は、国家対民衆の権力関係だけで捉えきれものではない。実際に起きた歴史事象は、それほど簡単ではない。徴兵制に反対した血税一揆と呼ばれる事象のさなかに、被差別部落が襲撃されている。関東大震災時の朝鮮人虐殺は、国家権力が主導したにしても、民衆が手を下している。民衆を一枚岩に捉えることも、民衆の暴力が必ず権力だけに向かうと想定することも、こうした被差別者に向けた民衆暴力から目を背けることにつながる。(藤野 2020: iii)

このように述べ、「権力に対する民衆の暴力と、被差別者に向けた民衆の暴力とが、それほど簡単に切り分けられない」(藤野 2020: iv) ことを指摘する。本稿のもととなる社会調査で遭遇した現実も、この指摘に合致する。以下で詳述するように、沖縄の建設業で搾取されながら生きる男性たちは、会社の社長や建設業協会や政治家、そして日本政府に向けて、暴力の矛先を向けることはなく、それは建設現場の新米従業員であり、地元の後輩たちに向けて行使される。

ただし、このことは人類学者が避けようとした野蛮で残酷な暴力を書くことに戻ることでない。より弱いものへと向かう暴力という行為の理由を書くことで、それはただ野蛮で残酷なものとして加害者を他者化するのではなく、相互に理解する方向が開かれることを射程に入れるものである。

### 2-3 文明化された社会における暴力

最後に、文明化された社会における暴力について述べる。社会学では暴力はおもに国家と関連付けられて議論されてきた。ヴェーバーは、「人間の共同体のうちで、ある特定の領域において (中略—打越)、正当な物理的な暴力の行使を独占することを要求し、それに成功している唯一の共同体」(Weber 1919=2009: 10-11) として、国家を定義した。またエリアスは、その国家が暴力を独占していく様子を文明化の過程として書いた (Elias 1969a=2010, 1969b=2010)。彼は、「野蛮」な「未開社会」ではなく、文明化された市民社会における暴力について、「なぜ暴力を振るうのか」から「なぜ我われは暴力を抑えるようになったのか」と問う視座を反転させた。それは、文明化した社会でこそ、戦争や大量虐殺を起こしてきたことを射程に入れた問いであった。それに対し、エリアスは共同体の人間関係やそこでの生活の場面で、私たちが行使していた暴力は、社会契約と引き換えに国家に譲り渡してしまっ

た過程を書き、その文明化によって私たちは暴力を抑えることとなったと説明する。

他方で私はエリアスの書く文明化の過程に対し、大まかには認めつつ、以下のような感覚を抱く。それは、私たちは暴力を国家に譲り渡したこともないし、また無意識のうちに奪われてもいないという感覚である。私は、特定の状況になれば、暴力を振るいうるし、誰かがそのような状況で暴力を振るえば、そのことを理解しうる。つまり、私たちは状況に応じて暴力を振るうこともあれば、振るわないこともあるという当たり前の事実に戻り立つ必要がある。暴力は当の本人がまったく統制できない行動でもなく、ある社会の興奮状態で起こる聖なる行為でもない。それは文明化された現代でも、いつでもどこでも誰でも行使しうる世俗的な行為のひとつである。その意味で、私たちはまだ完全には文明化されていないはずだ。そのうえで必要なことは、暴力という行為を理解することである<sup>7)</sup>。非日常の、聖なる行為として暴力やその機能を考察するだけではなく、世俗的な生活のなかのいかなる状況で私たちは暴力を振るい、そして抑えるのか。そして暴力を振るい／抑える状況の不均衡さについて書かなければならない。いままで暴力という行為は特殊なものとして扱われてきたため、行為として理解するという単純かつ基礎的な領域の調査、研究が十分に蓄積されているとはいえない。

たとえば、社会学者の見田宗介は時代を象徴する暴力（殺人事件）をもとに、社会批評を展開した（見田2008）。その論考が、ある集団や個人が起こす暴力から、その社会や時代の特殊性をつかもうとするのだとしたら、本稿はその社会や時代が既に埋め込まれているある集団や個人による暴力をただ理解するものである<sup>8)</sup>。

ここまで述べてきた暴力を問う視座として、石原俊の議論はひとつの指標と位置付けられる。石原は、1962年大分県の姫島で生じた男性島民による報復リンチ事件を対象とし、宮本常一がその暴力を擁護するスタンスをとったことに注目する。石原は宮本の仕事を「同時代＝近代のただなかで島々の自治がもつ創造性の系譜を示そうとした」と評価し、そのうえで「島々のコミュニオンは、ある局面では発展の障壁となりうるが、発展の基礎ともなりうるし、別の局面では外部からの破壊的な力に対する防衛力にもなる」と述べる（石原2021: 187-188）。あるリンチ事件を姫島の文脈や1960年代といった時代に位置づけながら、障壁にも防衛力にもなる様子を緻密に読み解く石原の視座は、本稿がめざす暴力の記述のあり方と多くを共有する。

それは、ある社会や時代の特殊性ではなく、私たちも行使しうる暴力を書くことである。そして、その暴力には合理性があるということ、またその暴力に、その社会と時代の固有性が刻まれているということ、このいつでもどこでも誰でも振るいうる暴力の合理性をその社会と歴史の固有性を押さえつつ書くこと、これが本稿で迫る暴力である<sup>9)</sup>。

## 2-4 暴力の理解社会学へ

ここまで述べてきた暴力への迫り方から取り残されてきたのが、世俗的な社会的行為として暴力を理解するという視座である。暴力を理解するということは、特定の状況で行為

者がその暴力という行為をどのように意味付け、またその行為が当該社会でどのように意味づけられていくのかといった、「価値分析と因果的解明の循環と連関」(中野 2020) によってなされる。暴力をそのような理解社会学の対象として考察することが本稿のとり視座である。

以下で展開する議論の前提となる理解概念について、押しておく。中野敏男は、ヴェーバーによる理解について「行為者の主観に即した動機理解と動機による行為の説明とが循環することを認め、この循環に内在していく仕方での理解可能性を開こうとするもの」(中野 2020: 60) と述べ、それを通じて「宗教的信仰や宗教生活の実践から生み出されて、個々人の生活態度に方向性を与えそれを保持させるような心理的駆動力 (Antriebe)」を明らかにすべきとする (中野 2020: 99-100)。

中野による理解概念のポイントは循環の箇所である。それは、反応としての行動でもなく、また環境→動機付け→行為といった単線的に行為を捉えるのでもない。それは、動機と行為の説明とが何度も循環する振る舞いとして行為を捉えるものである。殴ってはいけない、もしくは殴りたくないけれど、止められない。それは言語化がなされていない、身体、生活習慣レベルで起こる「わかっちゃいるけど、やめられない」行為の理解である。そして、その循環に調査者も巻き込まれることによって、その行為は他者に理解しうるものとなりえる。

ここまで述べてきたように、本稿で扱う暴力は、名前をもたない個人のパーソナリティによる病理ではない。また、生物として人類が本質的に併せ持つ衝動でもない。加えてマクロな国家による暴力やそれへの抵抗として書かれるものでも、また時代や社会を象徴する暴力でもない。本稿は、現在の沖縄の建設現場を確かに生きる上地や宮城といった(仮名ではあるが) 名前をもつ男性従業員によって行使される暴力を対象とし、それを社会的行為として理解する試みである。

### 3——暴力を調べる困難

—— なんで浩之をぶん殴ったんですか。

宮城 知らんよ、うしえてる [生意気だ] からよ。(居酒屋にて、2013年2月23日)

以下の議論は、社会調査を基礎として展開するが、このやりとりからわかるように、暴力を調べることはとても難しい。宮城(仮名、以下同様)による「知らんよ」は無回答でも、文字通りわかっていないわけでもない。ここに調査者が暴力を調べるにあたり幾重にもわたる困難がある。

暴力は、多くの社会において(戦争や死刑などを除いて)違法なものとされ、また道徳的に犯してはならないこととして位置付けられる。そのような社会では、その加害者も被害

者も暴力について多くを語ることはない。またそのような社会的制約だけでなく、暴力加害の当事者による語れない事情もある。暴力は往々にして、言葉によって自身のふるまいを相対化したり、また見通したりすることが難しい場合に生じることも要因のひとつである。

以下で紹介する調査データは、暴力の加害者と被害者の語りである。ただしそれは1回限りの生活史インタビューによるものではなく、10年以上にわたる参与観察調査をもとにした語りである。1回限りの生活史インタビューで、暴力をきくことは難しい。なぜなら、調査者は、上述したような暴力を非難するか否かの立場から逃れられないためである。非難する立場ならそもそも語ってくれることはないだろうし、また仮に賛同するにしても、それは不自然なことなので警戒されるだろう。

それに対し、本稿で採用した参与観察をもとにしたインタビュー法は、彼らによる暴力の場面に調査者として徐々に遭遇するようになり<sup>10)</sup>、その場を構成する成員として、暴力についてきくという手順で展開したものである。私は、加害者と被害者の生活をみて、また人生を追いかけながら、暴力について言語化されることを待ち、また言語化を働きかける。調査対象者は、調査者が聞いたことをただ言葉にするのではなく、特に暴力のようなセンシティブなことについて語る際には、語る形式が重要となる。例えば、以下の若者たちは暴力を振るわれることを恥ずかしいこととして語りたがらないマッチョな文化圏に生きていた。そこでは被害を慰め合うのではなく、被害を乗り越えた武勇伝として語る形式が必要である。参与観察を通じて、この語る形式や語るタイミングなどをつかみ、調査対象者が語る環境を整えることが本稿で採用した参与観察を基礎としたインタビュー法である<sup>11)</sup>。

また上で述べた、動機と行為の説明を何度も循環する過程でつくられる心理的駆動力をつかむためには、長年にわたり生活をともにする参与観察調査が適格的であった。

なお調査は、2007年より現在にいたるまで沖縄で継続している参与観察である。そこで私は当時の暴走族やヤンキーの若者、現在は建設従業員として働く彼らのパシリ（使いパシリ）としての役割を不十分ながら遂行し調査を続けてきた。

## 4——建設業からみる沖縄社会<sup>12)</sup>

沖縄の建設業で働く男性たちの日常で繰り返し行使される暴力を理解するためには、その社会と時代の固有性が編み込まれた様子を押さえることが欠かせない。ゆえに、以下では彼らが生きる沖縄の建設業やそこでつくられる社会関係について概観する。またそれらをふまえて、地元の暴走族から建設業者になる過程についても押さえる。

### 4-1 男性性と沖縄社会

犯罪社会学者のメッサーシュミットは、人種や階級、そして性差といった社会的要因から暴力に迫った (Messerschmidt 2014)。ここでは男性が男性性をめぐる危機に陥った際に暴

力を用いることが指摘される。それに対して、大山治彦は、(1) なぜ男性が女性よりも犯罪や非行を起こすのかという、性差に関する問いに対しては、十分な解答をあたえていない点、(2) 階級差が小さく、人種的差異が小さいとみなされている日本社会で、メッサーシュミットの議論をそのまま適用することはできない点について、付言する (大山 1995: 213)。

1 点目の性差と犯罪 (暴力) について、尾崎俊也は以下のように述べる。

男性性実践として暴力行為を考察した場合、暴力は手段であって、男性性実践が目的である。この文脈から言えることは、暴力でなくとも男性性実践が可能であるならば、暴力である必要はないということであり、重要なのは暴力行為にいたらなくとも男性性の闘争に関与している男性は少なくないということである。(尾崎 2017: 92)

尾崎によると、男性は支配的な男性性をめぐる争いを展開しており、それを容易に獲得できる男性は「手を汚すこと」はないが、それが困難となる場合は暴力行為でもって獲得がめざされる。このように、尾崎は男性性実践をめぐる資源の不均衡によって暴力を捉える。この視点は、以下で述べる沖縄の建設業で働く男性が男性性資源の不均衡ゆえに、暴力を振るう／抑える過程を理解する際に有効である。一般社会では、稼ぐこと、父親であること、家を継ぐことなどが男性性実践としてあげられる。沖縄の建設業の男性たちは、それらによって男性性実践を展開することは難しい。そんな彼らの男性性実践とは、地元社会において、まずは後輩を引き連れることであり、その次に愛人と交際することである。後輩を引き連れるということは、景気の浮き沈みに対応できる、つまり建設業で安定した稼ぎを象徴するものである。後輩を引き連れるための初期段階で暴力は手段として用いられる。その結果、後輩を引き連れることは地元社会で地位を示すことになる。愛人との交際については、後輩を引き連れ独立した会社をもち、自身は家計を支えつつ、遊ぶほどの稼ぎがあることをみせつけることとなる。

続いて 2 点目の課題は、暴力にせまるために、その地域の文脈をふまえる必要性についてである。沖縄社会は、歴史、社会構造、文化、言語などにおいて、日本社会とは大きく異なる。特に、製造業が空洞化し階層分化した社会構造とその歴史は、暴力をつかむ際に外せない。次頁の図は、沖縄社会の産業別総生産の割合である (図 1)。このグラフから、沖縄と本土のブルーカラー職に就くヤンキーの若者たちは、それぞれ異なる世界を生きていることがわかる。ヤンキーの若者たちの主な就職先は、コミュニケーション能力を必要とするサービス業や事務仕事の第 3 次産業ではなく、身体を資本とする肉体労働の第 2 次産業が中心となる。そこでまず注目すべき点は、沖縄の第 2 次産業の全体比 (14.1%) が全国平均 (26.1%) の約半分である点である。これは沖縄のヤンキーの若者たちが就く仕事によって生み出される総生産が、全国平均の約半分しかないこと、つまり彼らが就く仕事は本土の半分程度しかないことを示している。そして、その数値を半分としているのが、おおよそ全国平均と沖縄の製造業比の差 (15.7%) である。つまり本土のヤンキーの若者たち



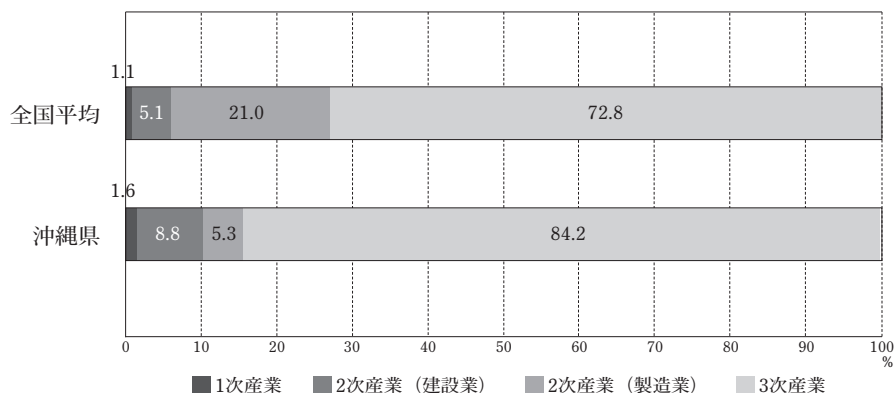
には「製造業に就く」という選択肢があるのに対し、沖縄の彼らには大きく抜け落ちているのである。沖縄のヤンキーの若者たちは、学校に行っても仕事に就けないと見越して自ら学校を去っていくケースが多いが、その理由がこのグラフからも明らかである。以下で述べるように、建設業に適応するためには、特定の先輩の「パシリ」となること、独特のうちなーぐちや言い回しを中学在籍時から習得しておく必要がある（打越 2020b）。先輩との関係を積み重ね、その技法や経験を同世代から学ぶことができる。彼らにとって、学校より地元社会の方が実質的に役に立つのである。

そして、このような学校から離れていく様子は、現在だけでなく「復帰」以降から現在までの長い期間にわたり生じてきた。沖縄の建設業界は、「復帰」直後から本土の大手ゼネコンと中小零細の地元の建設会社によって構成される。規模や実績がものをいう建設業界で、中小零細の地元建設会社が持続的に経営することは難しい。それは沖縄戦や占領政府時代の不公平な施策や入札制度といった歴史的事情、製造業がほとんど存在しない沖縄の産業構造、そして（製造業とは異なる）建設業固有の事情などによる不安定さである。

戦後から「復帰」、そして現在に至るまで、沖縄の多くの建設会社は倒産し、そこで働く従業員は失業した。会社や従業員に蓄積された技術や経験はそのたびにリセットされた。そのような状況に対し建設業界としては、入札における談合などで乗り切ろうとした。また地元の建設会社は、地元の後輩たちを労働力の「調整弁」として扱うことで倒産の危機を乗り切ろうとした。融通の利きやすい後輩たちを雇うことで、仕事がある時は無理やりにでも現場に連れ出し、仕事がない時には給料の支払いを遅らせたり、一部支給とするなどといった形での対処が可能になるからだ。一方、後輩たちにとっても、賃金が増えることは滅多にないものの、会社が倒産しない限り働くことができる。それは、「少年院上がり」であろうが刑務所に行こうが、なにがあっても生涯にわたり働き続けることを可能とする、彼らがつくりあげた「終身雇用制」であった。

また先輩たちは建設現場に長年勤めると、思うままに「使う」ことができる後輩たちを

図1：沖縄県と全国の総生産の産業別割合（2013年度）



（資料）内閣府「県民経済計算」より、打越が作成

確保できた。仕事の場面では使いバシリから重要な役回りまで、生活の場面では飲み会後の送迎、バイクのメンテナンスや修理、ナンバ要員などを課された。また後輩も特定の先輩につくことで、不特定の先輩からの無理難題を受けることなく、ある程度緩和することができた。このように地元建設会社、先輩、そして後輩たちは、地元の厳しい上下関係を用いることで、なんとか厳しい業界を生き抜き、労働環境や労働条件を部分的に緩和、改善してきたのである。

このように産業構造にもとづいた固有の社会関係を彼らは築いてきた。景気の浮き沈みによって多大な影響を受ける沖縄の建設業に就く者は、上下関係を基軸とした生活を営み、人生を歩んできた。その特徴は、将来に賭ける（蓄積する）のではなく、今を切り抜けることにある。彼らは学歴などの資源をほとんどもたない。ゆえに彼らは、多様で希少な資源（負債）を共有しようとする。役立つ資源や技術についてだけ共有するのではなく、理不尽な指示を出す先輩の対応などの引き受けたくないことも後輩たちは持ち回りで共有する。そしてそれらを通じて、後輩たちはどの先輩につくかを賭けているのである。常に隣で過ごし、できることを探して、雑用をこなす。このような関係を長く築くことで、後輩はある先輩専属のバシリとなる賭けを行う。学校や家族、そして警察、裁判所などは、彼らにとって頼れる対象ではない。彼らは、身近な先輩や後輩とのつながりを確保することを重視する。そうすることで、なんらかのトラブルに巻き込まれた際に、彼らはすべてを失うことを回避できる見通しをもつことができるのである。

#### 4-2 暴走族から建設業者へ

中学を早々に見切ったヤンキーの若者たちは、地元の暴走族で活動を始める。そこに集うことがつながりをつくり、情報を得て、働くことにつながるからだ。

中学時代は、親や教師、そして後輩など敵なしであった少年たちは、卒業式の翌日から、建設現場で「兵隊」と呼ばれ、怒鳴られ、時には厳しい仕打ちを受ける。厳しい現場から逃走し、再び戻ってくるということを何度か繰り返し、一人前になっていくというのが地元ヤンキーの若者たちが経験する建設業者となる一般的なコースであった。彼らの多くは、安心して過ごせる家庭もなく、仕事につながる学校に通うといった選択肢はない。そんななか、彼らは、地元の暴走族で活動し、先輩たちと関係をつくることで、仕事にありつく道を切り開いていった。

他方で地元は消極的に選ばれただけではなく、そこに集う彼らの合理性がある。まず地元には生活のルーティーンがある。家庭や学校で安心して過ごすことや必要なケアを受けていない彼らの多くが、地元の馴染みのメンバーといつもの場所で毎晩過ごす場所が地元だった。それは彼らの生活の基盤となった。いったんその基盤を獲得したのちに、それを再び失うことは恐怖であり、避けられる。ゆえに彼らは地元社会でトラブルに巻き込まれたり、先輩から理不尽なことを要求されたりしても、そこに留まろうとした。

地元での先輩たちの仕打ちは厳しく、要求は理不尽なものである。丸一日先輩のバイク

のメンテナンスを任されたり、深夜の送迎などを後輩たちは担当する。そのような要求に対して、後輩たちは断わるわけでもなく、完璧に遂行するでもない、適切な落としどころにもっていく言語能力や技法を身に付けていく。そのような能力や技法を3、4年かけて身に付けることで、厳しい場所である地元を、日々の生活のルーティーンをこなす安心できる場所、また役割を与えられ役に立つ場所につくりかえる。

地元は、このような基盤であり、またさまざまな資源を蓄積することで、実質的に役に立つ場所でもあった。先輩からバイク改造の技術を、そして運転技法を実地で教わることもできたし、それぞれの触法行為ごとにどのくらい警察署に勾留されるのかといった情報も共有された。時には、一緒に「キセツ（本土での期間労働）」に向かったり、地元の建設仕事を紹介され、その給料を互いに貸し借りした。彼らにとって、地元は成長の機会や重要な役割が与えられる場所だった。

このような状況により、上下関係が理不尽だったり、暴力を振るわれたとしても、彼らは地元を見切り出て行くのではなく、なんとか先輩を落ち着かせる方法で対処を試みる。このような技法は、狭隘な世界にある未熟さや無知にもとづくものではなく、彼らが建設業を生き抜く過程でつくった文化である。文化は生き方であり、世界を認識する方法である。建設業に特徴的である将来展望をもちづらい時間感覚や狭隘な空間感覚は、過酷な建設業を生きた結果として形作られたと同時に、建設業を生きる過程で自ら積極的に身につけてきたものである。

続いて、建設現場での参与観察の様子から、沖縄の建設業とそこでつくられる人間関係の特徴について紹介する。私が参与観察調査を実施した沖組（建設会社、仮名）は沖縄で20年以上経営を続けてきた型枠解体の会社である。2012年当時は、10代から30歳前後の若者と、50歳前後の中年層の合計100名程度の会社であった。2つの世代のうち、上の世代は社長の後輩たち、若い世代は社長の息子たちの後輩たちであった。賃金は日給6000円から8000円の間で推移していた。労働条件はいいものとはいえないが、給与を給料日前に前借りできること、給料日に給料が遅れずに満額支給されることは従業員たちにとって沖組で働く動機付けとなっていた。

建設現場ではシージャ [先輩] とうっとう [後輩] の上下関係を中心に仕事はすすめられた。建設現場には明文化されたマニュアルがないので、先輩によって仕事のすすめ方が大きく異なる。そこで、後輩たちは特定の先輩の仕事のすすめ方を習得しなければならなかった。そこでは先輩ごとに異なる仕事の癖や感覚を状況ごとに読み取る力が求められた。

例えば、現場では先輩から後輩に指示が出されることがある。建設現場では、例えば「この建設資材を10分以内に外のステージまで50本運んでください」というような言葉による指示が出されることはない。そのような場合、先輩たちは「えっ」という一言で、指示を出す。この一言で後輩は先輩が何を要求しているのか、どういう手順に従わなければならないのかということがわかるようにならないといけない。そこで間違えたり、確認

したりということをしていたら、先輩たちのもとで仕事をすすめることは難しくなる。後輩たちはそのような環境で働くために早くから準備をしなければならなかった。後輩たちからしても、不特定多数の先輩たちから指示を出されたり、無理難題を出されたりする状況より、特定の先輩に気に入られるということが、彼らの選択しうるよりましな選択であった。このような感覚や技術、そのもととなる関係性は数年かけて作り上げていくものである。ゆえに彼らは早々に学校を見切る。彼らには学校で過ごしている時間はなく、地元の先輩と強固な関係性を築き、その先にある建設業で働くという見通しを持つとする。それは上述した沖縄の社会構造を生きるなかで、彼らがとった合理的な選択なのである。

戦後日本社会に、さまざまな問題を含みつつも確立された日本的経営や日本型福祉といった体制が整っていった時代を、沖縄は経験していない。沖縄が「復帰」する前に本土社会は高度経済成長を成し遂げ、日本的経営の特徴である年功序列、終身雇用、企業別組合、そして企業、家族を基礎とする日本型福祉を確立した。しかし、高度経済成長を経験していない沖縄社会のブルーカラー層には、日本型福祉はほとんど根付いていない。それを一部補完してきたのが、地元の先輩と後輩の社会関係であった。

## 5 —— 沖縄における男性性と暴力の理解社会学

前節では、沖縄社会を生きるヤンキーの若者たちが地元の社会関係に頼らざるを得ない／頼って行く背景について述べた。以下では、調査の過程で遭遇したある暴力の場面について紹介しながら、彼らの暴力の動機や行為の説明を行う。

2012年年末の沖縄、沖組の忘年会が開催された。2次会の店へ向かう繁華街の路上において建設業の中堅従業員の宮城（30歳前後）は、会社を辞めたばかりの後輩の浩之（10代後半）とたまたま遭遇した。浩之は、側頭部に流行の剃り込みが交差して入っており、後ろ掛けサングラスのスタイルに、ハイネケンの瓶ビールを片手に仲間たちとにぎやかに繁華街のメインストリートを練り歩いていた。それを目にした宮城は、すれ違いざまに殴りかかった。

宮城 繁華街で前から浩之が余裕ぶっこいて歩いてくるわけよ。おいって捕まえてからパンチいれてやったよ。  
(居酒屋にて、2013年2月23日)

宮城は、悪びれた様子もなく当時の様子を振り返る。私はその場に遭遇することはなかったが、浩之からも以下のように話を聞いた。

浩之 あんなってやられて、それでも帰らずに、次の日も（仕事に）行ってってしてるの、やばいっすよ。普通のやつだったら、速攻でひんぎって[トンヅラして]ます

よ。けどやってられないんですすぐ辞めてやりましたよ。

(コンビニの駐車場で、2013年8月13日)

宮城は、以下のように振り返る。

宮城 (浩之は、相手の社長をつかって、辞めた建設会社の境遇について) 警察、訴えようばーな「訴えることをちらつかせている」わけよ。最近のわかたー「若いやつら」はこれだからダメ。

—— そうですけど、若い方では(仕事を)頑張ってた方じゃないです?

宮城 ううん、ぜんぜん(そんなことはない)。俺たちの(若い)頃は、しーじゃ「先輩」に怒られても、つーつー(聞き流しながら)で、「はいはい」言えればいいわけよ。あいつはそれが顔に出てるのがダメ。いちいち、言い訳するわけよ。仕事はできるけどダメ。

—— そうですかー。

宮城 楽なところに逃げるタイプ、一番、終わってる。

(居酒屋にて、2013年2月23日)

宮城による浩之への態度は非常に手厳しいものだが、沖縄の建設会社ではこのような上下関係にもとづいた厳しい仕打ちは、たびたび確認できるものである。宮城による暴力は、このような関係や態度にもとづいたものである。

浩之は、宮城と同じ班で働く従業員であった。私も2人と同じ班で働きながら調査をしていた。浩之は、中学にはほとんど通学せず、その多くを少年院で過ごした。そのような経験を有する浩之は、ある意味「鳴り物入り」で働き始めた。それに対して、多くの先輩従業員は厳しい仕打ちで対応した。彼が中学を卒業してすぐに建設現場で働き始めたのは、当時交際していた彼女が妊娠し、新しい家庭を築くためにお金が必要であったためだ。宮城も認めるように、浩之は年の割には仕事がよくできた。しかし彼は腰痛もちで、それを理由に仕事をよく休んだ。そして彼は欠勤を理由に他の先輩から暴行を受け、そのことをきっかけに、突然に連絡もなく、他の建設会社へ移っていった。

宮城も自身の浩之への接し方が理不尽であることを自覚していたが、彼にしてみれば、そういう先輩たちの仕打ちを自らは我慢してきたという自負があった。それに対し、浩之が突然辞めていったことに、宮城は我慢ならなかったと語った。

宮城の暴力を、沖縄の建設業の文脈に位置付けて考える。まず、製造業では仕事の技術や給料はステップアップするのに対し、建設業ではそれらはほとんどあがらずに数年で頭打ちとなる。また働き方も製造業はマニュアルに沿って働くが、建設業、なかでも沖縄の建設業では先輩のやり方こそが正しく、仮に作業の効率が悪くても先輩のやり方に従わざるを得ないといった事情があった。そしてその先輩たちは相互に作業手順をすり合わせる

ことはほとんどない。

それは一見すると非効率なやり方に見えるかもしれないが、数年後に同じ会社で働く見込みのない沖縄の建設業で、従業員を育てる意識や仕組みはほとんど存在しない。それゆえに、目の前の人間を動かすこと、そして目の前の先輩に従うことが、その場をなんとか切り抜くために優先される働き方であった。

沖縄の若者たちにとっては、マニュアルがあるわけでもなく給料が上がるわけでもないなか、特定の先輩に気に入られて、先輩の仕事の癖や性格を読み取って、先輩が喜ぶような接待や仕事の手順を身につけていく。沖縄の建設業はそのような社会関係をもとに成立してきたのだが、浩之はそれを抜けたのだ。忘年会があった日の夜、繁華街で浩之が流行りの格好で同世代の若者たちと騒ぎながら宮城とすれ違った場面は、浩之が地元の人間関係をもとに働く建設の世界から抜け出たことを見せつけるシーンとなった。建設現場でもギャンブルでもキャバクラでもいつも同じメンバーでいつもの展開となるのが建設業で生きていくには重要だった。特定の先輩と関係を作ることが、一番働きやすく、生活の基盤を獲得しやすいためだ。

宮城も浩之も中学を卒業した後、地元の建設業で働き始めた。10代の頃は先輩とあらゆる場面で能力差がある。例えば建設現場における体力や技術、賃金、また地元社会における顔の広さやキャバクラでの振る舞い方など、なににおいても先輩が上であった。また家族を築くなどの人生経験などにおいてもその差がはっきりと表れる。最初はあらゆる場面で先輩と後輩の間には大きな能力差が存在する。しかし宮城ら中堅世代の多くは離婚し養育費を払えないため、子どもとは会うこともできなくなり、20代後半になればキャバクラ店でちやほやされることもなくなる。後輩との間にあったあらゆる能力差がなくなっていく。また仕事においても、浩之たちは、建設会社で4、5年程度働くと、あらゆる場面で宮城たちに追いついてしまう。5年程度働けば賃金も上限に達し追いつく。これがステップアップできる製造業とそうでない建設業の違いとして彼らが直面する現実である。

そのような環境でつくられる厳しい上下関係は、その関係を再び明確にするために用いられた。年齢以外の能力差が消えていくなかで、それさえもないことでされることは先輩たちにとって自身が積み重ねてきた下積みがないことになってしまうことであった。だからこそ先輩は関係者がたくさんいる建設現場や繁華街で周囲に見せつけるかのように後輩を殴りつける。厳しい上下関係は迫りくる後輩たちが、いまだに支配下にあることを周囲に、そしてその後輩にさし示すためになされたものである。

宮城は「あいつはそれが顔に出るのがダメ」と話した。この言葉だけに注目すると理不尽なものに思えるが、ここまで述べてきた地元の文脈に沿えば筋が通るものとして読めてくる。マニュアルのない建設現場では、仕事の手順をめぐっても、先輩と後輩の仕事の手順はそれぞれ異なることが生じる。製造業では、先輩後輩に関係なくどちらの手順がより効率的かしっかりと判断がされて間違っている方が先輩後輩に関係なく修正される。しかし建設業の場合は効率的な運び方ではなく先輩の運び方が効率悪くても採用されることにな

る。そのような作業が1日中、繰り返すなかで後輩たちは先輩がたとえ非効率的な作業手順（資材搬出の動線に障害物があったり、搬出する資材の選択ミスなど）で作業していても、たいていの場合は我慢する。しかし、極まれにそれが顔に出てしまう<sup>19)</sup>。宮城の言葉は、あらゆるところで浩之に追いつかれた上で、作業手順をめぐって不満があることを突き付けられた場面となる。

後輩に追いつかれることの恐怖にもとづく暴力は、現在の沖縄の建設業だからこそ現れるものである。製造業であれば、先輩は次の技術段階やより高い給与、そして後輩にはつけない地位につくことができる。他方で宮城は追いつかれ、そこであたかも自身と浩之がフラットな関係にあるような態度をとるということは、宮城にとって屈辱的なものとして映った。そこで改めて「おまえ、勘違いするなよ」という気持ちを込めて、改めて上下関係を確認する意図をもち暴力を振るった。

現在の沖縄社会は、少子化が徐々に進んでいる。それによって、宮城は自身が担っていた先輩たちのパシリ役割を後輩たちに引き継げなくなっている。また自身が引き連れる後輩たちもいなくなり、自身が先輩であることさえ確認することが難しい状態となった。そこで、そのような理不尽な先輩の対応を含む地元の人間関係を共有（分散）したり、それらを後輩たちに継承する（押し付ける）ことから、解放され自由にふるまう浩之を宮城は許せなかった。不自由な環境で作りに上げてきた社会関係に居続ける先輩にとっては、その生活や社会関係の形こそが稼ぐ方法であり生き方である。それはこれまで賭けてきたことであり、そしてこれから見返りを受け取る見込みももっていたのだ。

ここまで、宮城が振るった暴力について詳しく記述し、理解をすすめた。そのように暴力の理由を書くことは、暴力を抑えることへの理解にもつながる。以下では、暴力を抑えるようになったある親方のケースをみる。

2019年8月、建設業の親方さんたちの模合に参加した。参加者の多くは、元建設現場の従業員で、現在は規模こそ小さいが経営を手掛けていた。ある親方は以下のように話した。

最近は余裕があるから、(若い従業員を) 殴らなくなりました。昔はやらないと会社が潰れるから、タラタラしてる奴はやりました。単価がよくなったんですけど、よくなったって言っても普通になっただけですよ。昔が酷すぎたんですよ。

(居酒屋にて、2019年7月27日)

2012年、その親方はスリムな体型で狭い現場をすり抜けながら働いていた。その後、独立した直後の厳しい時期には自らも現場に出て働いたと言う。現在、彼の腰回りには贅肉がつき建設会社の社長らしい体型になっている。今は現場に出なくても、自分一人分程度の「あがり（収益）」を確保できると話す。彼は現場を抜けたことで、現在は手を出さなくなった。

ここからは、沖縄の建設業と暴力は、決して必然的な関係ではないということがわかる。それらは景気状況、なかでもステップアップできる環境によって、今でも起こりえるし、反対に抑えうるものとなるのである。

## 6—— おわりに

今後の課題について述べる。暴力という行為と、沖縄の歴史と構造の間には、いまだ埋め合わせなければならない水準が幾重にも広がる。たとえば、彼らの人間関係における暴力のメカニズムの分析やその動機の類型化などによって、それらを埋め合わせなければならない。また本稿では、男性たちの暴力についての語りをもとに、家庭における女性たちへの暴力を扱わなかった。しかし家庭内における暴力と、繁華街や建設現場での暴力は、男性性をめぐる闘争という点で連続しうる。今後は両者の関係について明らかにする。

時代や社会構造によって、男性性実践を展開する資源は不均衡に分布される。あるところでは暴力が現れる余地などない一方で、ある関係や状況、時代において日常的に暴力は現れる。そして現代社会において、その不均衡さを大きく方向づけるのは、ジェンダーと産業構造による分布である。それらによって不均衡な現れ方をする暴力を、一つひとつていねいに調べて理解を深めていくことが、地味な作業であるが暴力を問う際に外してはならない。その作業の先に、沖縄社会に押し付けている犠牲や差別的構造が明らかとなるはずだ。

暴力を理解することは決してその行為を正当化することではない。むしろ理解をよりすすめることで、暴力を封印することなく抑えることにつながりうるのである。暴力は、本能でも衝動でも、聖なる儀礼のような特殊なものでもなく、ただ私たちの世俗的な生活に存在し、今後も生まれえるし、それゆえに相互に理解可能な社会的行為のひとつである。

私たちが暴力を振るわないのは、国家に暴力を独占されているからだけではない。振るわなくてもなんとかやっていける社会や時代に生きているからである。逆に何とかやっていけなくなれば、私たちは再び暴力を振るうし、そのことを相互に理解できる。正しさを振りかざして暴力を非難することも、治療の対象として扱うことも異なる、そして暴力と無縁の立場から暴力を書くのではなく、暴力を振るわなくてもやっていける特権性を直視し、自らも暴力をふるう恐れとともに暴力を書き続けなければならない。

### 〈注〉

- 1) 構造的暴力や象徴的暴力といった間接的な暴力に関する研究の蓄積はあるが、本稿では対象としない。
- 2) 以下は、元妻である女性に暴行した加害者の上地とその地元の先輩たちとのやりとりである。慶太も裕太も家庭内でパートナーに暴力を振るうことはあると言うが、それはやるべき状況で、それに応じた強度の暴力であること、また自慢げに語るのではないと考えている。ゆえに上地に対しては、否定的な態度を示している。自慢げに語られ、またその程度が問われることのない男性への暴



力とは異なるものとしてとらえられている。実際に行使する暴力とは異なり、このような暴力をめぐる語りの意味世界がある。

上地 子どもと会いたくて、(奥さんの)家行ったら、玄関で「養育費ないなら帰れ」って言うから、かーっときて…。家閉められたんで、2階のベランダあがって、窓割って入りました。「殺されるー」って叫ぶから、近所でーじ[大騒ぎに]なってます。

慶太 窓はやりすぎだろ、おまえ。

裕太 (奥さんを)どんなしてくるした[殴った]？

上地 警察、呼んでて(パトカーが)来るのわかってたから、これでこいつとは最後だと思って、チャーくるしー[ひどい暴力]です。ボディも顔も。

裕太 何発入れた？

上地 10発くらいです。

裕太 はー、おまえバカか。

健二 家行ったら、奥さん、鼻血出てたよ。

(建設会社の駐車場、2012年8月16日、警察署から出所した日)

- 3) 行為を理解する際に、それが行われる歴史と構造の固有性を書くことについては、岸政彦の議論を参考にした。岸によると、「調査実践は、いつもあの同型的な語りのまわりをぐるぐるとまわり、遠くに引き離されたと思ったらすぐに渦の中心へと引き寄せられてしまう」(岸 2004: 119)、そのような「繫留点」がある。調査者や歴史と構造は、生活史の語りに繋ぎ止められるのだが、それは可能なことでも、必要なことでもなく、そうになってしまうものである(岸 2004: 121)。このように調査者が受動的に繋ぎ止められてしまうような臨界点に達することで、あるケースの「特殊性や固有性を、一般性や普遍性のもとで理解する」(岸 2018: 167)ことが可能となる。
- 4) 暴力については、生物学や哲学などでも論じられてきた主題だが、著者の能力を超えるのでここでは扱わない。
- 5) 深野佳和は、行動と行為という概念の変遷を扱い、以下のように定義する。

行動概念は、行動主義の変遷に伴って内的過程を含める考え方もあるが、むしろ行為概念との相違を明確にするため、当初の「外部から観察可能な(overtな)反応の総体であり、客観的に記述可能なもの」という定義の方が適切と考えられる。(深野 1999: 179)

行動が主として外部から観察可能な全体的反応であるのに対して、行為はその内的過程を重視する。つまり「明らかな目的観念または動機を有し、思慮・選択・決心を経て意識的に行われる意志的動作で、善悪の判断の対象となるもの」である。(深野 1999: 176)

本稿では、深野の指摘と定義に沿って、行動は動機などの内的過程を含まないものとして、また行為はそれらを重視するものとして扱う。

- 6) 松田は民衆による暴力の危うさについて、以下のように言及する。

民衆の共同体はたしかに危ういものではある。暴力の現場で泡のように生まれ出てきた仮の共同体は、持続性も制度化も欠落しているものだ。そのうえ絶えず、国家に忠誠を誓う暴力へと変質させようとする圧力と巧妙な罠が襲いかかってくる。(松田 1998: 273)

しかし、ここで述べられる民衆暴力の危うさは、国家によって巧妙な罠をかけられて、その可能性を「骨抜き」にされてしまう危うさであり、本稿で注目するより弱いものへと向かう危うさとは異

なるものである。

- 7) 暴力を理解することは、加害者の責任を免除したり、正当化するためではないが、結果的に免責することにはつながりえる。この点については、別途論じる。また私は調査過程で暴力についての価値判断から避けられず、彼らの暴力を共感しながら聞くことがあることについて、開示しておく。
- 8) 1968年に生じた永山則夫による連続殺人事件について、見田はその事件からその時代や社会変動を読み解く華麗な分析を展開した。これに対し、筆者たちの共同研究グループでは、永山についてのルポルタージュや裁判記録、本人の手記や文学作品を愚直に読み込み地味な分析を展開した（宮内ほか 2018）。その論稿で展開したことは、本稿で採用する暴力へのアプローチと大きく重なっている。

この他に暴力をめぐる社会学研究には、宝月誠（1980）による蓄積がある。宝月は、1978年に起きた都市アパートの騒音をめぐる居住者間の暴力事件について、被害者へのインタビューと手記をもとに分析する。彼によると、その暴力は都市化にともなう（1）住人相互の無関心、（2）暴力のサブカルチャーに染まった人びとの混入という枠組みで説明がなされるが、扱われる事例もその分析も、暴力という行為の固有性に迫れているとはいいいがたい。

- 9) 人類学における暴力が、部族間や部族内における暴力の報復がいかによえられるかに重点が置かれてきたのに対し、文明化された社会では（国家や共同体を除く）小規模の社会や集団、そして個人の間で報復の連鎖が生じることはまれである。むしろ特定の閉鎖的な場所や親密圏で、ある者からある者への一方的な暴力が常態化するので、そこに報復の連鎖が生まれる余地はほとんどない。よって、本稿ではそのような特定の状況下で一方的になされる暴力、しかもそれは外部の法律や価値規範が介入しづらい共同体や小集団における暴力に焦点をあてることとなる。

このように、現代において暴力はみえなくなったが、依然として存在し続ける。そのような暴力は圧倒的な国家権力による行使か、親密圏での行使となることで、人びとの暴力への実践感覚は衰えがちとなる。その結果、暴力への過度なおそれと、暴力を統制できるといった裏付けのないおごりが残存することとなる。両者は理解が不十分という点で大差はない。本稿は暴力の加害者による意味世界を対象とするが、本人が統制できると考えることと、実際に統制できるかは異なることである。その点で暴力を行動ととらえる、つまり行使する主体に制御できないふるまいとして暴力を捉える視座を軽視することはできない。社会的行為として暴力の動機や行為の見通しに注目するが、それは暴力を意のままに統制できることはまったく別のことである。

- 10) 調査を始めて数年の頃、私は「打越さん」と呼ばれ、建設現場では1日中お手伝いとして参加する部外者であった。その後、10年近くたち、私は「打越」と呼び捨てにされ、通常の業務を任されるようになった。部外者から周辺的な従業員のひとりとなったことで、私は彼らの暴力の場面に遭遇することとなった。ここからは、暴力が外に向けては隠すべきものであること、他方で内部のやりとりには慣れた者の世界では起こりえることであり、それは隠す必要のない／隠せないこととして存在していることがわかる。
- 11) 筆者は、関係機関や知人を通じて調査対象者を紹介してもらった形式のインタビューを得意としない。本稿で実施した参与観察を基礎としたインタビュー法は、相互に他愛もない話をしながら、調査対象者が語ってくれるまで待つものである。それは、数年のこともあれば、10年以上になることもあるが、その時間によって調査対象者と筆者が共有する言葉や感覚を醸成し、それらを用いて調査を進めることが可能となる。そのような手順で進めた生活史調査として、打越（2021, 近刊）がある。
- 12) 4節と5節は、拙稿（2018, 2020a）の一部を、大幅に加筆修正したものである。
- 13) 私の場合、建設現場での調査中は常にしかめっ面で働くこととなる。しかし、宮城は私を殴ることはない。なぜなら、私があらゆる能力をめぐって、圧倒的に宮城の下に位置しているためである。

## 《文献》

- Clastres, Pierre, 1977, *Archeologie de la Violence: La Guerre dans les Societes Primitives*, Editions de L'aube. (= 2003, 毬藻充訳『暴力の考古学——未開社会における戦争』現代企画室.)
- Elias, Norbert, 1969a, *Über den Prozess der Zivilisation*, Francke Verlag, Bern. (=2010, 赤井慧爾・中村元保・吉田正勝訳『文明化の過程 (上) ——ヨーロッパ上流階層の風俗の変遷』法政大学出版局.)
- , 1969b, *Über den Prozess der Zivilisation*, Francke Verlag, Bern. (=2010, 波田節夫・溝辺敬一・羽田洋・藤平浩之訳『文明化の過程 (下) ——社会の変遷／文明化の理論のための見取図』法政大学出版局.)
- 藤野裕子, 2020, 『民衆暴力——一揆・暴動・虐殺の日本近代』中央公論社.
- 深野佳和, 1999, 「行動と行為」日本作業療法士協会編『作業療法』18(3): 176-180.
- Girard, Rene, 1972, *La Violence et le Sacré*, Grasset. (=1982, 古田幸男訳『暴力と聖なるもの』法政大学出版局.)
- 宝月誠, 1980, 『暴力の社会学』世界思想社.
- 石原俊, 2021, 「戦後日本における島々の集団的創造性」松田素二編『集合的創造性——コンヴィヴィアルな人間学のために』世界思想社, 171-198.
- 岸政彦, 2004, 「語り・差異・構造——沖縄生活史研究における『繋留点』」大阪市立大学人権問題研究会編『人権問題研究』4: 101-123.
- , 2018, 「プリンとクワガタ——実在への回路としてのディテール」『マンゴーと手榴弾——生活史の理論』勁草書房, 136-168.
- 松田素二, 1998, 「実践暴力の行方——ケニアと西成の暴動現場から」田中雅一編『暴力の文化人類学』京都大学学術出版会, 251-276.
- Messerschmidt, J. W., 2014, *Crime as Structured Action: Doing Masculinities, Race, Class, Sexuality, and Crime*, Lanham: Rowman & Littlefield Publishers.
- 見田宗介, 2008, 『まなざしの地獄——尽きなく生きることの社会学』河出書房新社.
- 宮内洋・松宮朝・新藤慶・石岡丈昇・打越正行, 2018, 「貧困調査のクリティック (3) ——『まなざしの地獄』再考」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』131: 33-54.
- 中野敏男, 2020, 『ヴェーバー入門——理解社会学の射程』筑摩書房.
- 奥村隆, 2001, 『エリアス・暴力への問い』勁草書房.
- 大山治彦, 1995, 「少年非行と男らしさ」日本社会病理学会編『現代の社会病理 X』197-219.
- 尾崎俊也, 2017, 「男性性実践としての男性の暴力行為——メッサーシュミットの構造化された行為理論によって何が明らかにされ得るか」関西社会学会編『フォーラム現代社会学』16: 85-97.
- Staub, E., 1999, "The Roots of Evil: Social Conditions, Culture, Personality and Basic Human Needs", *Personality and Social Psychology Review*, 3: 179-192.
- 田村達, 2016, 「攻撃と道徳」大淵憲一監修『紛争・暴力・公正の心理学』北大路書房, 2-12.
- 田中雅一, 1998, 「暴力の文化人類学序論」田中雅一編『暴力の文化人類学』京都大学学術出版会, 3-28.
- 打越正行, 2018, 「つくられたしーじゃ・うっとぅ関係——沖縄の建設業の社会史」広島部落解放研究所編『部落解放研究』24: 47-67.
- , 2020a, 「沖縄のヤンキーの若者と地元——建設業と製造業の違いに着目して」日本平和学会編『平和研究 (「沖縄問題」の本質)』54: 71-90.
- , 2020b, 「ヤンキーうちなーぐちの言語社会学試論」沖縄国際大学南島文化研究所編『南島文化』43: 43-81.
- , 2021, 「誰も助けてくれなかった」岸政彦編『東京の生活史』筑摩書房, 193-202.
- , 近刊, 「俺の妹と父ちゃんは、ちゃんと国から感謝状もらってるけど警察署から。俺はちゃん

と逮捕状もらってるよ (笑)」岸政彦編『沖縄の生活史』みすず書房。

Weber, Max, 1919, *Politik als Beruf Wissenschaft als Beruf*. (=2009、中山元訳『職業としての政治／職業としての学問』日経 BP 社.)

謝辞：本稿のもととなった調査、研究は、JSPS 科研費 21K18519 ならびに 21H00835 の助成を受けたものです。また本稿は、以下の口頭発表を基に執筆したものである。研究助成、発表機会、そして貴重なコメントをいただいたことに感謝申し上げます。「暴力の理解社会学——沖縄の建設現場での参与観察をもとに」(主催：九州大学人間環境学府多分野連携プログラム「子どもの育ちを支える協同関係の構築にむけて～福祉と教育を結ぶ領域横断的基礎研究～」、九州大学、2021 年 3 月 18 日)。

---

[うちこし まさゆき・和光大学現代人間学部人間科学科講師]